

浄

monthly
JŌDO

昭和10年▶平成18年

土

2.3 合併
February March 2006
Vol.72 No.800

800号記念大特集
法然上人と私

真野龍海
中村康隆
成田有恒
坪井俊映
服部法丸
大田秀三
阿川文正
宮林昭彦
梯 實圓
浅田正博
長島尚道



通巻

号

いけらば念佛の功つもり
しならば浄土へまいりなん
とてもかくても此身には
思ひわづらふ事ぞなきと思ぬれば
死生ともにわづらひなし

東京芝

天光院

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

寺院紀行

寺院紀行



浄土宗東京教区寺院番号「1」の天光院本堂。天光院は創建当時から境内の場所は変わっていない。天光院第二十二世真野龍海住職は大正十一年滋賀県生まれで、大正大学学長など要職を歴任し、現在は浄土宗勸学、知恩院顧問、増上寺学監、芝学園顧問、法然上人鑽仰会会長など重責を担う



天光院本尊阿弥陀如来は江戸時代のもので、
関東大震災で光背と台座は消失している。本
尊が安置される本堂は二階にあり、靴のまま
入れるなど、色々な工夫がしてある



浄土宗の宗宝にもなっている寺宝の
観智国師源誓存応上人の肖像。上人
は中世浄土宗史の傑僧で、いまでも
増上寺の新しい住職がこの天光院観
智国師肖像の前で特別な式、伝衣式
を行っている



シュリーホールと名付けられた書院で親・子・孫の三
代で記念撮影。中央が真野龍海住職、向かって右が真
野竜人副住職、左が真野威人上人



天光院第二十一世真野正順住職の自
画像。若かりし頃に渡欧、本誌を発
行する法然上人顕仰会を設立するな
ど、活動的な住職だった

天光院第九世詮也上人の墓石になっていた不動尊像。第十八世観碩上人が伽藍復興とともに再建したもので、現在は墓地入り口に建っている



阿弥陀如来を意味する梵字「キリーク」にかたどられたつつじ・さつきの庭木。手前入口、つくばいには、「水琴窟」がある

七十余坪の天光院墓地の奥に建つ歴代上人の墓。この左奥が威徳院になっていて、威徳院は天光院住職が兼務している

浄土

通巻800号記念

2006/2・3月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 東京芝・天光院	写真＝タカオカ邦彦	1
通巻800号記念大特集－法然上人と私－		
法然上人の御心	真野龍海	6
和合と共生	中村康隆	8
鎖り鎌は語る	成田有恒	10
本願念仏の教え	坪井俊映	12
法語を読む	服部法丸	14
師魂仏心	大田秀三	16
お導きと私	阿川文正	20
父の遺言忘れがたく	宮林昭彦	22
法然上人を偲ぶ	梯 實圓	24
出会いということ	浅田正博	26
時宗からみた法然上人	長島尚道	28
会いたい人 小沢昭一さん③	関 容子	30
寺院紀行 東京芝・天光院	真山 剛	38
コラム	大室了皓	47
浄土誌上句会	選者＝増田河郎子	48
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよしろう	50
編集後記		52

表紙題字＝浄土門主 中村康隆猊下
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

法然上人の 御心

真野龍海

法然上人鑽仰会会長

八百号！ よくぞ、ここまで来た！ と
『浄土』内外のみなさんに、賞讃と感謝の言葉をお贈りしたい。

何か大きな団体とか機関に支えられての事業ならとにかく、法然上人鑽仰の御縁で結ばれた力で、気がつくとも宗教界にも珍しい長期の金字塔を建ち上げてしまっているのです。

私も不思議の御縁で、今は会長ということ
で御挨拶するということになってしまいました
た。この八百号を続けたものは何だろうか

思いますと、声には出ませんけれど、法然上人の御心がそうさせたのだと思い、感謝せずにはおられません。かなりの有力な資本をバックにした一流の雑誌といえど、時代の流れの中に浮き沈みしています。その中で『浄土』というユニークな名の本誌が、今日あるのは法然上人の御心の支えだと合掌します。

私と『浄土』の接近は昭和十年、発刊間もなくの頃からです。私は津の天然寺に居りました。この寺は一寸した本山形式になっていて、山内寺院が六ヶ院、総括する本坊の住職が天然寺住職です。当時、私の父（前田進龍）がその住職でした。この寺に日曜学校があり、日曜毎に山内御住職は童話等を交替でされていました。私も小学生—中学生の少年ながら、修行の一端として勤めました。

その天然寺では、月刊の『浄土』と仏教雑誌とを共同で購入して回覧して読んでおりました。私の居た本坊、本堂には、その本が滞留することが多く、ゆっくり読めました。未だに中村辨康上人の信仰相談の見出しは印象にくつきり残っています。

昭和15年、私は佛教専門学校（今の佛教大学）に入り、部活動では伝道部、児童教化部へと入りました。伝道部では、野外伝道があり、例月、北野伝道（二条組天幕伝道）真如堂、県祭等で行いました。めいめい原稿を作り練習を重ねて出動します。その原稿には『浄土』の信仰記事等を活用させていただきました。自信のある原稿では自信のある話しが出来、自ら聴衆も足を留める、というわけです。

昭和17年、大正大学梵文学に入学して以来は、専攻以外は全く時間がなく、専ら梵文中に没入したと思っておりました。しかし、世は大戦後の困窮の時代でした。梵文だけでは食って行けません。先輩の先生方も、そういう者には遠くから、又、近くからなんとかしてやろう、という考えで見えて下さったようです。

さてその頃、浄土宗教学院という研究態勢が、東部では真野正順先生を中心として整ってきまして、活動が始っていました。その事務所が、宗としてなく、天光院内に設けてあ

りました。その事務の前任の吉田さんがおやめになったので、きみ、手伝わないか、との事でした。そのお声がけを下さったのは、当時の『浄土』をリードし運営されていた藤田寛雅先生、竹中信常先生で、ちよくちよくとその事務所のある天光院に詰め、会務をなさっておりました。

この両先生から声をかけられ教学院のお仕事をやる書記をやらぬか、と言われました。やや間を置いて言われるには、実はついでのこの天光院を事務所として活動している雑誌『浄土』を手伝うことになるのだがとのお話し。当時としては、先生の言いつけは従うものと思っていたので、お引き受けしました。ここで、遠ざかっていた『浄土』が一気に身近かになってしまいました。

それどころか天光院に入り、真野家すら継ぐこと、現在のような姿です。これも法然上人の御心と受けとめて今日に到っております。

皆々様、『浄土』に対し、有難うございました。今後ともよろしくお願い致します。

和合と共生

中村康隆

浄土門主総本山知恩院門跡

この度『浄土』通巻八百号がめでたく出版できました由、真に宗幸の至りと感謝申し上げます。

昭和十年四月、当時大正大学学長の真野正順先生が中心となって、「本当に仏教の思想と信仰を現代に生かすためには、真に偉大な人格を師表と仰ぎ、実践を通して信仰を育て養わなければならない。その偉大な人格こそ法然上人である」という趣旨のもと、多くの同志が『法然上人讃仰会』を設立され、『浄土』誌を発刊せられて、今日まで宗祖法然上

人の立教の精神に立脚し、時機相応の念仏信仰を幅広く強力に推進する事を目的とし、活動を続けられてますことは、真に貴いことと存じます。

小柄も、父辨康が当初より関わっていた関係で、昭和十年六月号より昭和六十一年の間に三十有余回をも記載して頂き、また平成六年一月号から今日まで『浄土』の表紙題字にして頂き、感謝に堪えません。

宗祖大師のころは、「末法万年のはじめ」というように末法の世の中であり、『平家物語』に「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず。ただ春の夜の夢の如し。たけき者も遂には滅びぬ。偏に風の前の塵に同じ」と、また『方丈記』に「世の人皆飢ゑ死ぬれば、日を経つつきはまり行くさま、少水の魚のたとへにかなへり。はてには笠うち着、足ひき包み、よろしき姿したるもの、ひたすらに家ごとに乞ひ歩く。」

とあるように動乱と貧困の時代でありました。

このような時代に法然上人は幼少時に父君を殺害され、亡き父君の「汝更に会稽の恥を思い、敵人を恨むる事なかれ」「家を出で我菩提をとぶらい、みずから解脱を求めよ」との遺言にて、全ての衆生が救われるために、比叡山に登り「凡夫の心は、物にしたがひてうつりやすし」「我等ごときはすでに戒定慧の三学の器にあらず。この三学のほかに我心に相応する法門ありや、我身に堪えたる修行あると」と悩み悩んだ末に、報恩蔵にて善導大師『観経疏』の「一心専念」の文に接し、月影の徧く照らす有様に、弥陀一佛の全てを摂取したまう大慈悲の御心を汲み取られて、思わず涙ながらに高聲念仏数百遍され、そして父君の没年と同じ四十三歳、お念仏で全ての人々が救われる浄土宗を開かれたのです。

浄土宗を開かれた後は、法然上人は幾度と無く法難にあわれましたが、

「我たとい死刑に行わるとも、この事言わず

ばあるべからず」と念仏を伝えるために決意を持ち続けられ流罪となりました。帰洛後上人は、「我、往生は一切衆生の為なり」と申され、八十歳にて「如来の光明は徧く十方世界を照らして 念仏の衆生を 摂取して捨て給わず」の文を唱えて、お念仏の中にてお浄土に還られたのでした。

その法然上人の八百年大遠忌を五年後に控え、上人への報恩感謝の思いを大切に致し、是非皆様におかれましては、積極的なご協力をお願い致したい所存でございます。また上人は弟子たちに残された遺言の中で「予が遺跡は諸州に遍満すべし」「念仏を修せんところはみなこれ予が遺跡」と説かれましたが、その御遺志を尊び、お念仏の信心を人々におてつぎして広められ、伝道に励んで頂きたいものです。さすれば必ずや、み仏の大慈悲を頂いて、全世界に人々の和合と共生の浄土の暮らしが到来する事と存じまして、一言ご挨拶とさせていただきます。

合掌和南

鎖り鎌は 語る

成田有恒

大本山増上寺法主
作家・寺内大吉

私がはじめて岡山の誕生寺を訪れたのは五十年近くも前のことだ。未だ無名だった司馬遼太郎が連れていってくれた。彼は浄土宗立の上宮学園の出身で、在校中に二度ばかり遠足でいったことがあるという。

ひとわりお詣りをしたあと町をぶらついた。誕生寺の門前に古びた農具屋があつて、そこで珍しい物を見つけた。草刈り鎌である。珍しかったのは「左利き」用の鎌だったことだ。近所の老僧に左利きの人がいて、草刈りにいつも難儀するところばすのを思い出して早速買い求めた。

「法然さんは左利きだったのかいなあ」

大阪へ戻る車中で司馬遼は考え込んでそんな言葉をくりかえした。私もそのあと、御真筆の名号などを拝見して左利きだったのかも知れないと思ったりした。だが京都博物館でいわゆる「興善寺文書」——法然さま直筆のお

手紙をみて左利きの考えを放棄した。

殆んど同じ時機に司馬遼もはつきりと否定してきた。あれは武術の鎖り鎌の鎌だという。なるほど右手で鎖を操作して相手を引き寄せ、て致命傷を与えるには左手の鎌でなければならぬ。

それにしても残忍な武器で、発案者の穴戸某は誕生寺のすぐ近くの出身だった。なぜあんな凶器を思いついたのだろうか。

誕生寺の御忌は毎年二月下旬に行われるという。寒気のまったなかで、とりわけ北方の那義山から吹きおろす風は身を切られるようである。そんな都度、本堂に坐る土地の信者は「ああ、また法然婆アが来た」と身をふるわせるそうである。しかも誕生寺の縁起では母堂秦氏は法然上人が比叡山へ登った同じ久安三年（一一四七）の十一月に亡くなっている。那義山から吹きおろす寒風を「法然婆

ア」と呼ぶあたり「怨念」みたいなものが感じられてならない。もしかすると母堂は非業の死を遂げられたのではあるまいか。生涯で一度も故郷へ帰らなかった法然上人。

むまれてはまづおもい出ん故郷に
ちぎりし友の深きまことを

「新載集」にのこるこのお歌を読み返していると、故郷へ戻れなかった法然さまが幼な馴染みの友から情報を得ていたらしいことが推察できる。地元の、それも身内の者による裏切りがそんな「怨念」をつくり出していたのではあるまいか。

すべてを知っている地元農民、あの残忍な凶器鎖り鎌もそんな「怨念」から考察されたのではあるまいか。

いづれにせよ私自身もだが『浄土』誌も多角度からの法然像を究明して欲しいものである。

本願念仏の教え に対する批判

坪井俊映

大本山金戒光明寺法主

「私の法然上人」とは私の崇敬する法然上人ということで、念仏の一法一行によって一切の人々が平等に救済されることを、日本にて初めて説かれた上人のことである。

上人以前の奈良や比叡山に伝わった仏教が主として出家や居士といわれる指導者の処世の仏教であつたのに対して、上人は現世に苦悩する人間を等しく救済する教えを説かれた。かかる民衆救済の教えは、旧来の奈良・比叡山の仏教には容れられず厳しい批判を受けられた。しかし上人は不撓不屈の精神をもつて対処されて、広く民衆の教化に努められたのである。

法然上人の八十年の御生涯の中で、四十三歳（浄土帰入）までは比叡山にあつて就学求道に励まれた時代であり、一切経を何回も披閲され、比叡山に伝わっていない書物は借り出して読まれたほど熱心に就学に努められたのである。

上人の後半生は自証された本願念仏の教えを広く世の人々に説かれたことに対し、奈良比叡山の教団より厳しい非難批判が浴びせられた。その始めと思われるものは、天台宗顕真法印との坂本における談合であろう。その時顕真法印は批評して「法然房は智慧深遠なりといえどもいささか偏執の失あり」と云つたという。法然上人はこの時す

でに念仏の一法一行に徹していられたことと思う。

続いて行われた顕真法印等の天台宗碩学との京都大原における問答について「機根くらべには源空勝ちたりし」と云われるほど、人間の機根の解説について「煩惱具足の凡夫」罪惡生死の凡夫に對する解説に厳しいものがあつたようである。

続いて東大寺にて『浄土三部經』の講述が行われているが、これは比叡山ではあまり重視しない善導大師の考えをもつて、善導大師を重視する南都において講述されたことである。そののち厳しい批判があつて（『興福寺奏狀』）上人の考えに誤りが在ることを指摘している。

このほかに専修念仏を重視する余りに戒法を軽視するもの、他の佛、菩薩を軽んずるもの等もあったらしく、比叡山より法然門下に七箇条制誡の遵守が迫られている。

以上大略南都北嶺教団との関係批判を略述したのであるが、このほかに多くの批判非難が法然教団に浴びせられている。これに法然はそれぞれに反論されているので、そのひとつを紹介する。

一向専修は大偏執である

人多く謗^{そし}つて云う、たとひ諸行往生を許すと雖も、全く念仏往生の障^{さや}げとなるべからず。何故ぞ強^{かた}ちに一向専念の義を立つるや、これ大偏執の義なり（『二期物語』）

法然のこの批判に對する考え

自他宗の学者、宗々所立の義を各別にころえずして、自宗の儀に違^{ちが}はるるをばみなひがことと心えたるは、いはれなきことなり

（修学についての御物語）

さらに

オホヨソ念仏ヲ謗ズルモノハ、地獄ニオチテ五劫苦ヲウクルコトキハマリナシ

（大胡太郎の御返事）

とも云われて、批判非難するものと厳しく対決されている姿を見る。

ご法語を 読む

服部法丸

百萬遍知恩寺法主

「シカル間、ナゲキナゲキ経蔵ニイリ、カナシミカナシミ聖教ニムカヒテ、手ヅカラ、ミヅカラ、ヒラキ見しに、善導和尚ノ観經の疏ノ、「一心二專ヲ弥陀ノ名号ヲ念ジ、行住坐臥二時節ノ久近ヲ問ハズ、念々ニ捨テザルモノ、コレヲ正定ノ業ト名ヅク、彼ノ佛ノ願ニ順ズルガ故に。云々」

毎日拝読する法然上人ご法話の中で、最近元祖さまの当時のご心境を拝して、特に有難く感じられるのがこの一文であります。

叡山登嶺以来九ヶ年にして、はじめて下山された法然さまの目に映ったのは、日本史上最大の内乱と称される保元・平治の乱の前後とて、混乱を極めた都の状況でありました。この悲惨を叡山において修行一途に過ごされて、純粋な心情の二十四歳の青年僧侶はどう感じたでありましょうか。

九歳の時の父漆間時国公の死に際しての遺言、そして母とも死別した天涯孤独の法然上人、加えてあこがれの叡山の状況は決して、

この青年僧の心を満たしてくるものではなく、心血を注いで学んだ天台の教学も法然さまの心に安らぎを与え得る道ではありませんでした。やがて七日間の釈迦堂参籠の後、法然さまの脚は、自然と奈良に向いました。

奈良は佛都であり、日本仏教発祥の地とて、大寺が聳え大和尚が住しておられるところ。法然さまはこの大徳に対して、自らの胸中を吐露され、父の遺言の実行出来る道、そして母の菩提を弔う道、加えて現代に生きる人々を救い得る真実の仏教を問われるのでありました。「ホウー。あなたが智慧第一、持戒第一と、叡山にて譽の高い法然房源空どのか。その道は私ではなく、あなたが一番よくご存じのはず。どうか私にも教えていただきたい。」

ほめられて 淋しくもどる 法然房

やがて法然さまは失意の身で再び叡山へ戻られるのでありますが、その心は決意でかたまっておりました。「亡き両親を安堵させる道、巷にさまよう人々を救う道を、他の人に

教えて貰おうとしたのは私の甘えであった。あの立派なお釈迦さまがお説き下さった五千余巻のお経の中にこそ、この法然が求めているものがきつと説かれているに違いない。私はこのお経の中から、永く求めていたものを見付けてみせる。それが出来るまで決して二度とこの比叡の山から下ることはない。」との不退転の決意をもって山なす聖教に向われたのでありました。「なげきなげき経蔵に入り、悲しみ悲しみ聖教に向いしに」のご法語には元祖さまの深意が込められているのでありました。

やがて善導大師の御著、観経疏とのお出会いのときが訪れてまいります。摩訶止観や観念の念佛ではない。行住座臥を問わず、時節の久近も問わない本願念仏こそ、凡夫救済のために、み佛さまが正定の業としてお示し下された究極の凡夫往生の道であると確信されるのであります。冒頭のご法話を拝するとき法然さまのご苦勞が偲ばれ、ただ低頭あるのみ。

師魂佛心

大田秀三

大本山清浄華院法主

大東亜戦争の敗戦後の昭和二十一年三月の荒れた大正大学の校庭に新たな決意を胸に、やつれた将校服姿で私は暫し旧大講堂の前に立ちすくんでいたのである。明照学舎の寮監の許可を得て北寮一番奥の部屋に入る事となった。終戦後朝鮮釜山知恩寺に母アイ、妹秀子、戦死した兄霊山の子二人が出雲に引揚げて来たのは二月であつたが、私は学部二年で出征し、残された六ヶ月就学しなければならなかった。

学費もないので復学を諦めようと思つてしたが、母アイが内緒で持ち帰ったカンパン三袋（カンパンの一つ一つに十円札が折り込まれていた）を差出されての涙の復学（宗教科）であつた。

四月初旬卒業論文の準備のためお会いしたのが宗教学科主任の真野正順先生であつた。

羽織袴姿の先生は暫く青空を眺めて沈黙しておられたが「パスカル」をやつて見給えと一言云われ立ち去られた。私は啞然とした。

パスカルの定理は聞き知っていたが、数学者、物理学者である以外の知識は皆無であった。岩波書店の知人に『パスカルに於ける人間の研究』三木清『構想力の論理』、懺悔道としての哲学、西田哲学論文集等をいただき、又『パスカルの方法』森有正、パスカルの『パンセ』断章由木康、柳田泉訳出『プロパシヤル』並びに『オピュスキュル』由木康訳、パスカルと哲学三宅茂著、西洋近世哲学史等々を私なりに、居を印旛沼農家の離れに、又法縁千葉佐貫勝隆寺の留守役をつとめ乍ら勉強に励んだ五ヶ月であった。愚生論文四頁に「我々は敗戦の現実と将来に対する不安に懊悩して沈滞することなく不安の自覚に於て人間存在の根底に立ち返り、事実を事実として直視……敗戦国としての運命性を脱し文化国家、道義的国家として真に生きる道は開展して来るのであり、現実の不安存在に逃避することなき自覚徹底への運びは宗教的信仰の力によるべき道はない」。かかる観点から17

世紀初頭の文芸復興と宗教改革の時代にあつて政治的、思想的にも非常に物情騒然とした時代にパスカルは偉大な物理学者・幾何学者でしかもジャンセンイスト派の酷しい神学者であつたが、現実世界の矛盾を通しての人間存在の分析と解釈を為し究極の立場における不安の自覚に於て「信仰は神の賜物であつて理性的思惟の贈り物でない」²⁷⁹と信仰の超理性の限界を明らかにしている。（人間存在の構造）更にパスカル独自の方法・見解によつて人間存在の三段階の秩序1、身体（王侯・権力者・貴族・支配者等）2、精神（理性的合理主義者・学究・科学者等）3、慈悲（神と共に生けるもの）にあてはめている。前二者は慈悲の一つも引き出すことが出来ない。権力、名誉、光彩は学問上、神を愛する事は不必要としているし、秩序内に於ける解釈で可能であるとし、法然も流刑、キリストも磔刑されてしまうのであると。（賭と回心）

夫々の独立の秩序の中では到達し得ない

し、自己否定的絶対的転換（西田論文集）が行わなければならない。そこで宗教の選擇とか神の信仰はパスカルに於いては論証でも理屈でなく「賭」なのである。「人間は死、悲惨、無知を癒すことが出来なかったので何も考えぬことを工夫した」¹⁶⁸と人間の死について考へないことは生の自己逃避である。「不安と懷疑、安息と自己逃避の惨めな存在なのである。而して不安の状態に於いて「此れか彼れか」²⁰⁵と最後の態度にふらつくのである。信仰は決断である（西田論文集）。決断による飛躍的転入を為し「神の呼声に應ずる」のでなければ宗教的不安は解決出来ないのである。

賭の本質はその理論的証明でなく、神の實在に対し理屈でなく実践的意志の決断をなさしむる證明である。小論文に於いてはこの賭の説に於いて其の教義と異なるとは云え浄土

教の凡夫救済の弥陀の本願力、慈悲を信ずる他力的契機に於いて正に同じであるとし、①觀經疏の二河白道の喩えをあげて二者択一を説き ②法然上人の『選擇集』の「往生之業・念佛為先」念佛正行は一枚起請文に及ばんとしております。

敬慕する故真野正順教授の「パスカル」との一声が「パスカルの宗教觀に関する一考察」の卒論となり、法然上人の御教えにふれる最初の機縁となったのであります。清浄華院に住して五年も経た今日、「向阿上人（本山五世）の三部仮名鈔の勉学に励み法然上人八百年大遠忌を控え師恩に酬いるため愈々自行研鑽、化他精進いたしたい所存です。

文中断章の番号は「パンセ」（レオン・ブランシヴィク版・由木・柳田・訳出）による。



「法然上人御影」^{にんかい}忍海筆 東京港区 最勝院蔵

お導きと私

私が幼稚園に通っていた時だったでしょう。祖母より色々な童話を聞かされましたが、時折り折本になった法然上人の絵ときの本を見ながらお話しをしてくれました。夜討ちのこと、母との別れ、比叡登嶺など、かすかに記憶に残っております。

大正大学大学院の修士論文に、計らずも『四十八巻伝の研究』と題して知恩院所蔵の正本と当麻往生院（奥院）所蔵の副本の原本（ともに国宝）比較調査を行いました。当時史学科の主任であった高柳光寿教授と浄土学主任石井教道教授のご指導のもとに書誌学的研究をふまえながら、法然上人の絵巻の詞書と絵図を直接目に触れながらの比較調査が出来た事を、今もって尊い仏縁、そして最高の指導教授に恵まれた事を感謝しております。

その後ご縁を頂いて、法然上人の殆んど総

大本山善導寺法主

阿川文正

ての絵詞伝を拝覧する事が出来たのも無上の喜びであります。大正大学に奉職し、浄土学研究室に所属して定年を迎えるまでの四十年間、印度・中国・日本と浄土教祖師の浄土思想を講じて参ります過程の中で、学問と信仰に於いて最終的に行き着く所は、二祖三代の教学、中でも『選択集』を中心とする法然上人の御法語を通して法然教学に帰着するものでありました。これが浄土宗の宗学というものであり、浄土宗の生命であります。私は、伝記・語録・法話を通して、法然上人のお導きを戴きました。

法然上人は凡入報土を高唱し、一向専修の念仏に帰入して浄土宗を開かれました。上人は、「源空は己に得たる心地にて念仏は申すなり」と申され、念仏を称えれば必ず往生できるといふ確信、即ち決定心けつぎんしんを確立すること

の大切さを自ら示されました。また、『選択集』には、「浄土の教、時機を叩たたきて行運に当り、念仏の行、水月を感じて昇降を得たり」と説かれて、阿弥陀仏と私どもと、如何に隔たりがあつても、念仏を称えれば仏は即ただちに応えられることを教えられました。阿弥陀仏は、私どもが称える念仏の声によって本願力が働き、その願力によって呼・応の関係、仏・凡の関係が堅く結ばれ、たとえ十万億の彼方といえども、それを即座に横に飛び越えて（横超断四流）浄土に往生するのであります。

一切衆生を漏れなく救済されるこの教えをお説きになられたのが、法然上人であります。私は『選択集』をはじめ、石井教道編『法然上人全集』、井川定慶編『法然上人伝全集』、『法然上人法語集』、『浄土宗聖典』は、座右から離さず大切にしております。

父の遺言

忘れがたく

宮林昭彦

大本山光明寺法王

この世の出会いとは不思議なものである。一番最初の人との出会いは親であるが、意識するのは長じて思春期のころである。しかし、親の出会いと命のつながり

の不思議さを感じるのは、「子をもって知る親の恩」ともいわれるが、子供を育ててみて親子のえにしの深さを感じる。私が生れた直後、昭和七年満州事変がおこり父は現役で応召され二年ほどで満州より帰還し、昭和十二年の日支事変に再度の応召で戦場へ出征した。しかし職業軍人として生きるのではなく、父の望みは、僧侶として、とくに布教師として教化にあたることであつた。師匠が五重や授戒の勸誡師として終生巡教の旅に出かけている姿に感化されたのである。その父が兵役から除隊されて帰郷すると、寸暇を惜しんで、仏書を繙き、とくに勅修御傳を熟読している背中を見ると子供心にも大きく感じたのである。そして振り向いて

「時国ふかき疵をこうぶりて死門にのぞむとき、敵人をうらむる事なかれ、これひとえに先世の宿業なり。もし遺恨をむすばば、そのあだ世々につきがたかるべし。しかじはやく俗をのがれ家を出てわが菩薩をとぶらい、みづからの解脱を求んには」といって端坐して西にむかい、合掌して仏を念じ眠るがごとくして息絶にけり」

この言葉を少し抑揚をつけながら讃題として静かに語りかけた。そのとき家族はその前に座って父の予行のための説教を聞かされたものである。

そのときはじめて法然上人が九歳のとき夜襲にあい出家された動機を知らされたのである。父は戦場で現実に報復のために敵を殺し、怨みをはらす武士道の精神とはいいいながら、戦争に荷担することに残酷さを痛感し忤怩たるものを感じたようである。国家の体制に従うか、僧侶として法然上人の出家されて仇討ちの報復を超えて、平和を求められたことの、どちらに命をかけるか、父の二律背反の苦悩があったようだ。その父が四度目の戦争に参加し、三十八歳で戦死をした。終戦後一年経って父の遺骨は最後の戦場の地フィリッピンから家族のもとへ帰還した。父の不在中祖父が師匠をつとめて育ててくれたが、遺骨を前に、「お前の親父は、大学卒業後直ぐに戦地へ征き、最前線で戦ってきたが、帰国するたびに、戦争はむごい、何より民衆が巻き込まれ、子どもや家族が殺され死んでゆく姿を見るのは堪えがたい。その中でただお念仏だけが心を安らぎ救いであると云っていた。お前も父の求めた

道を歩むか、どうか決心をしるよ」と。

青年期に入り出家への道が定まらないとき、一人父の遺骨と対面して父の残した説教の資料を繙く中に、行間に感ずる父の無念さとともに別れた悲しみ寂しさを味わったのである。

「会者定離は常のならい、今はじめたるに非ず。何ぞ深く歎かんや。宿縁むなしからずは、同一蓮に坐せん。浄土の再会はなほだ近きにあり、今の別れはしばしの悲しみ、春の夜の夢の如し。誹謗ともに縁として、先きに生まれて後に導かん。引接縁はこれ浄土の業なり（十六門記）」

父のノートの文字が目飛び込んだ。この文は法然上人が晩年『御流刑の時門弟に示された御詞』として示されたものである。父も最後、若い命を失ったのであるが、念仏によって決定往生したと安堵の思いを深くしている。法然上人が「父の遺言忘れがたく」と云われたお言葉を父の戦死に導かれ、薄き父の縁であったが、出家の道を歩む機縁を受けたことを有難く思うのである。

法然聖人 を偲ぶ

梯 實圓

かけはし

じつえん

浄土真宗本願寺派勸学寮員
浄土真宗本願寺派宗学院講師

法然聖人は、いま私がいちばんお会いして、お言葉をたまわりたい方の一人です。幸い多くの御法語が残されていますので、それを拝読して楽しんでおります。これは『法然上人行状絵図』第二一卷に収録されている御法語です。

人々、後世の事申しけるついでに、往生は魚食せぬものこそすれといふ人あり、あるひは、魚食するものこそすれといふ人あり。とかく論じけるを、上人ききたまひて、魚くふものの往生せんには、鵜ぞせんずる。魚くはぬものせんには、猿ぞせんずる。くふにもよらず、くはぬにもよらず。ただ念仏もうすもの往生はする。とぞ源空はしりたる、とぞ仰せられける。幾人かの門弟たちが吉水の草庵に集まって、後世の助かる道を語り合っているうちに、いつの間にか魚を食べることの是非に議論が移ってまいりました。「魚を食べた、生臭い口でお念仏をするとい

うような不謹慎なものは往生できない。魚鳥を食したもののや、ニラやニンニクなどを食べたものが臨終の病人を見舞っただけで、往生の障りになると説かれた証文もあるではないか」という人がいたのでしよう。それに対して「そんなことはない、魚を食べるような破戒無慚むざんなものをこそ救いたまうのが阿弥陀仏の本願である。魚食が往生の障りになるなどというものこそ本願他力を知らぬものである」と反論する人がでて、魚食のよしあし、破戒の是非を議論しあつて、決着がつかなくなりしました。そこで聖人のご判断を仰ごうと、ことの子細しさいを申しあげたところ、聖人のご判断はまことに明快でした。

「魚を食うものが往生するのならば、川で魚をあさっている鵜こそ真つ先に往生するだろよ。もし魚を食べないものが往生するというのなら、魚を食べない山猿こそ往生するだろう。往生するかしないかは、魚を食べるかそれでも、食べないからでもない、念仏をする

かしないかによる。ただ本願にまかせて念仏するものこそ往生すると源空は心得ています」と仰せられたというのです。

ユウモアをまじえながら、本質をズバリと言いつけられています。私どもは、ともすれば枝葉末節に目が眩んで、物事の本質を見失つた議論に走りやすいのですが、さすが法然聖人は、事柄の本質を洞察とうさつして、盤根錯節ばんこんさくせつを一刀両断にしようという鋭い切れ味をもつた方でした。時の人々が聖人を「智慧第一の法然房」と讃えたのは、たんに聖人の知識の量の豊富さだけを誉めた言葉ではなかったと思います。むしろ氾濫はんらんするさまざまな情報に惑わされることなく、人生にとって何が一番大切であるかということを明確に指示されたことを讃えた言葉だったのでしよう。

出会い ということ

浅田正博

龍谷大学教授

私が法然上人を思うとき、常に親鸞聖人の存在があります。いわば親鸞聖人を通して法然上人を眺めるのが私にとっての法然上人観です。

なぜならば、私はたえず親鸞聖人がうらやましく思えるからです。例えば『歎異抄』に

親鸞におきては た、念佛して 弥陀にたすけられ まひらすべしと よきひとの おほせをかふりて 信ずるほかに 別の子細なきなり 念仏はまことに 浄土にむまる、たねにてや はんべらん また地獄におつべき業にてや はんべるらん 総じてもて 存知せざるなり

とあります。この『歎異抄』の箇所を拝読するとき、私は身の毛もよだつほどにすさまじいものを感じるのです。「念仏とは浄土に生れる種なのか、地獄に堕ちるべき業なのかを親鸞は知らない」と言いきるのです。にもかかわらずお念仏を称えるのは、ただ「よき人」の仰せのままに信ずる以外に別の理由がないと言います。この「よき人」こそが法然上人です。ですから、法然上人が「ただ念仏して 弥陀にたすけられ まひらすべしと」申される事のみを信じるというのが親鸞

聖人のお念仏の受け止め方だと言ってよいでしょう。

このような信じ方は私たちに可能でしょうか。私にはどうしても出来そうにありません。どこか一部分、ほんのわずかですが疑いの眼を残して眺めるのが普通です。自分の全身全霊をなげうって師匠に直参するところが残念ながら私には出来ません。だからこそ、この文章を読むたびに私は身の毛がよだつ思いにかられるのです。

たとひ法然聖人にすかされ まひらせて 念仏して 地獄におちたりとも さらに 後悔すべからず さふらう

このように『歎異抄』は続きます。いわば法然上人に「だまされて」念佛して地獄に堕ちても後悔はしない、というのです。ここまでしてなお師を信じ切れるものであろうかとすら思います。ですから、このような師匠と弟子、法然上人と親鸞聖人とのお二人を大変うらやましく思うと同時に、恐ろしくさえ感じる事もあります。

どうしてそこまで……と考えたとき、親鸞聖人の深い自己内省の思索と、その機根に合致した法然上人の

奥深い念佛の教義があったからでしょう。親鸞聖人の『高僧和讃』に

曠劫多生のあひだにも 出離の強縁しらざりき
本師源空いまさずは このたびむなくすぎなましが
あります。「曠劫多生のあひだにも 出離の強縁しらざりき」とは親鸞聖人の深い思索からにじみ出た自己内省の言葉だと思えます。自分にはどれだけ永い期間修行したとしても迷いの世界を抜け出すことは出来ない、という絶望の淵からの呻吟に似たものを感じます。

その上で、もし法然上人にお出遭いすることがなかったならば、今生も虚しく過ぎ去って、また迷界を経巡ることになったであつたらうに……というこの和讃の裏には、法然上人の深い教えに出遭った歓喜が満ちあふれているといってもいいでしょう。

このような師匠に出会えたことは、人生にとっての最高の宗教的幸せといえましょう。この意味で、親鸞聖人における法然上人の出会いを私は大変うらやましく思うのです。

時宗からみた 法然上人

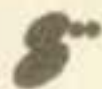
長島尚道

時宗宗学林学頭

私は時宗の僧侶です。大正大学へ入学してから、「法然上人」という名前をたびたび耳にするようになりました。二、三年生になると浄土学関係の講義では、法然上人についてくわしく学ぶようになりました。

時宗の宗祖・一遍上人は法然上人より約百年後に世に出た聖であり、浄土教の法系でいえば、法然上人―証空上人―聖達上人―一遍上人と続きます。法然上人から見れば、ひ孫弟子になります。そこで、私は法然上人について考える時には、いつも一遍上人を通して見てしまいます。

たとえば、法然上人は『一枚起請文^{いちまいきしょうもん}』の中で「念仏を信ぜん人は、たとひ一代の法をよくよく学すとも一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同して、智者のふるまひをせずして、ただ一向に念仏すべし」と語っています。この文の解釈はおかしなところがあるかも知れませんが、つまり、念仏を信じる人は、たとえ釈尊が生涯かけて



説いた教えを学んだとしても、一文も理解できない愚か者と同様にして、尼や在家信者も学のあるなしにかかわらず、ただひたすら念仏をとることである」と勧めています。

同様に一遍上人も、『一遍上人語録』門人伝説八十七の中で、伊予の国に仏阿弥陀仏という尼がおり、特別に習いもしないで仏の教えを自然に語っていました。日ごろいつも、「知りてしらせれ、還りて愚痴なれ」、すなわち、「よく知っていても知らない身になれば、智者も愚痴にかえって念仏せよ」と言っていました。この考えは浄土の教えにかなっている、一遍上人は高く評価して語っています。

また、一遍上人が興願僧都こうがんそうずにあてた手紙（『一遍上人語録』消息法話）では、念仏の行者の用心、安心あんじんについて尋ねられたのに対する一遍上人の返事なのですが、念仏の行者の心すべきことについて、南無阿弥陀仏ととなえるほかに何の用心もなく、またこの外に示

すべき安心もないこと、続いて、昔からのいろいろな念仏の智者たちが、定めていた仏法の要義があるが、みな諸々の疑惑に対するかきりその要文です。だから、念仏の行者はこのようなことをもうち捨てて、ただ念仏すればよい、と述べています。

また、この手紙の最後に、ただ愚かな者の心に立ちかえって念仏しなさいと言っています。そこで阿弥陀仏は、この言葉を実践する尼であると言っていてよいでしょう。

しかし、愚痴にかえるといっても学問をしたことを忘れろとか、学問なんて無用であるとか言っているわけではありません。人間の少しばかりの才智や学問は往生には役立たないと知って、ただひたすら念仏せよ、と言うのです。

これらのことから、私は法然上人は一遍上人の身近な尊敬すべき念仏の師であったと考えています。

連載

会いたい人 関 容子



小沢昭一さん ③

撮影／タカオカ邦彦

俳優座の養成所時代、お互いを認め合い、影響し合う友人を得た。のちに演出家になる早野寿郎だった。

「集団でいるとだいたいいくつかの群むれに分れるものですが、俺の群むれよりも大きい群作って中心で話をしてるやつがいて、何だあいつは、と思ったのが早野との出会いです。早野とくれば勘平ですからね、『忠臣蔵』の。すぐに勘平と呼ぶことにして、彼とは何だか気が合ってよくつきあいました。」

小沢さんがこの話をし始めたのは、東京ステーションホテルの二階のラウンジだったが、窓の外には何本もの線路が夕闇の中で鈍く光って見えていた。

「早野は沖縄で育っていますからね。内地の線路が光ってるのが珍しい、って言うってた。向うはあんなに頻繁に列車が通らないから錆びてるんですって。そんなことを言う早野とぼくが育った環境の違いだね。向うも東京っ子のぼくを、何かと面白く思ったようでした」

二人がまず意気投合したのは、俳優座を率いる千田是也に傾倒したこと。

「千田先生崇拜というのがそんなにいるわけじゃなかったんですよ。それで二人は呼吸が合った。ぼくは千田先生の演出家としてよりも演技のほうにまずあこがれました。先生の『近代俳優街』は耽読致しましたが、書いてることとやることと、先生全然違うんです（笑）。当時、リアリズム、ナチュラリズムに近いようなのが新劇にはもてはやされていたんですが、先生のはスパツと鉈で割るような切り口のお芝居で、すごい存在感がありました。一方の民藝の滝沢修さんの演技はリアリズムの極ですから、両極端。嘶家と言えば志ん生が千田先生で文楽が滝沢さんですよ。ぼくの演技の本質は、もちろん両先生には及ぶべくもない低レベルですが、それでも、練って練って作り上げる文楽・滝沢型のようなんですが、一見出たとこ勝負の感じのする志ん生・千田型の破調に惹かれるところがあつ

会いたたい人 関 容子

昭和38年、「俳優小劇場」での「とら」（撮影・土生一俊）



て、今でもまだ両方に揺れ動いてますけどね」

これにはちよつと後日譚がある。

小沢さんが最晩年の志ん生師匠をお宅に訪ねたときのこと。

「病氣でもう高座は無理だろうと言われてたのに、ちゃんと勉強してました。伺ったとき、読んでた本をスツと布団の下にかくしたんですが、ちよつと立ったときに見たら、円喬の即記本でした。名人と言われた円朝よりも円喬のほうが上だ、って古老がみんな言ってた円喬を、ちゃんと研究してたんですね。あとで志ん朝さんに訊いたら、親父は出たとこ勝負に見せて、なあになあに、勉強してるのを見せまい……ってことですよ、って言うてました」

小沢さんは俳優座養成所の二年の養成期間を終え、早稲田大学仏文科も卒業。卒論のテーマはフランスの新しい演劇運動を推進したジャック・コポーだった。

「早野たちと一緒に新人会という演劇集団を作って、千田先生が俳優座の中ではやれないようなサルトルとかブレヒトとかの新しい前衛劇を、千田演出でやりたい、というのがぼくたちの狙いでした。ぼくはそころたくさん出てきた民放のラジオに台本かかえて各局へめぐってましたけど、千田先生はラジオが嫌いだね。口先だけの小達者な俳優になる、って。でも新人会発足にあたってそのお祝いに北条秀司さんが書いてくれた『丹那トンネル』というラジオドラマ。これを劇団ユニツトで出演して資金にあてよう、というときに、千田先生が出てくださったんですよ。先生が出てくれればギャラが違いますからね、ぐつと増えるわけで有難かった。しかしどういふふうに演じるのかな、と思って見てたら、なるほど身体全体で演技をなさるから、マイクから外れて台詞が聞えなくなったり、暴れて衝立倒しちゃったり、もう大変（笑）。ラジオドラマとしてはあんまりうまくいかないん

だけど、ぼくは今でも先生の身をもつて示された教えを守って、大声でラジオのお喋りをやっています。獅子吼、って言葉があるけど、自信を持って怒鳴り上げておりますよ」

本当に、『小沢昭一的のころ』なんて三十何年も続いている名番組だけれど、タクシーの中などでいつ遭遇しても、語勢があつて景気がよくて、愉快だったり心に強く響いたりする。これが千田システムだったとは知らなかった。

「ジャン・ジュネの『黒人たち』という芝居で、まっ黒に塗って喜劇じゃなくマジに演技したら、これがなかなかいけるんで、その扮装に自信を得ました。その後、映画にもずいぶん出るようになって、詐欺師の役なんか、アメリカからバイヤーが来て商社をだます設定だと、監督、これ黒人でどうでしょう、なんて言うと、面白いかもしれないね、って。あんまり映画でそういうのやる人いないんですけどね」

これにもちよつと後日譚。

「シャネルズって、顔を黒く塗って出る歌のグループがあつたけど、あれは僕の映画見て思いついたそうなんです。中の一人が公然とテレビで言っていましたから。映画ではあらゆる階層、職種をやりましたね。天皇陛下のような扮装で、あ、そう、を連発したら不敬罪になるって、真面目なプロデューサーに禁止されました。その点浮浪者やると気が楽です。扮装が気に入って、新宿の町を紙袋引きずって歩いてても誰も気がつかない。あんまり気に入ったんで、いったんうちへ帰って女房に見せました（笑）。それでまた現場に戻る、という無駄なことやっています」

英子夫人の感想は「あら、ぴったりだわ」。

「集団というのは何ごとによらず難しいもので、早野は新人会の代表的立場だったけど、酒ばっかり飲んでダメだ、なんて批判するのがいて、結局分裂してわれわれは俳優小劇

場というのを作りました。小山田宗徳とか楠侑子とかも一緒にした。そしたらなぜか千田先生のご機嫌が悪くなって、演出してくださらない。そんなところから早野が演出するようになるわけですけど、そうこうするうちにめでたく復縁となつて、『ヴォイツェック』という芝居を先生の演出で上演できたときの嬉しさは、今も忘れられません」

私はその芝居は見たことがなかったが、アルバン・ベルクの前衛的なオペラ『ヴォイツェック』(Wozzeck)なら二、三度観ている。原作はゲオルク・ビュヒナーの戯曲(Woyzeck)で、主人公は貧しい床屋上りの兵卒。小沢さんは『ヴォイツェック』の主演をつとめた。

「ぼくたちが芝居してたころ、ちょうどドイツのデューブリュッケという、ブレヒトの専門劇団みたいなのが来日して、同じ芝居をやったんですよ。で、観に行きました。こっちは翻訳のセリフがみんな身体に入ってますか

ら、ドイツ語でやられても全部わかる。とっても面白かったけど、でも全然違うんですね。こっちは下級兵士の役で、ハイ、そうであります、つて言うところを、向うは、ダア、ひと言ですからね、これじゃあテンポが出ますよ。それで両劇団が打上げてから、ドイツ大使館が懇親会を開いてくれたんですが、そしてたら向うもこっちを観に来てたんですね。通訳を通じてぼくが褒められたところは、沼の中に入つて出てくる場面。稽古のとき先生に叱られたとこなんです。お前、なんで沼から出てそのままどんどん行くんた。靴ぬいで水出して、それから行け、つてね。ドイツ側の俳優に、主人公の几帳面な性格がそこに出てて、神経が繊細だつてことがわかる、あそこがよかったつてぼくが買彼られて……またそろ千田傾倒になりましたね」

一方、早野寿郎ともずいぶんいい仕事をした。

「これまでの芝居つてもものの根本を疑つてみ

2005年11月、紀伊國屋ホールでの「唐来参和」(とうらいさんな)のパンフ

11月8日(木)～16日(木) 紀伊國屋ホール 入場料 5000円(税別)

OZAWA SHOICHI
ON STAGE
"TOURAI SANNA"

あの「お楽しみ」をもいふと、
小沢昭一、難波繁雄の舌鋒を、

井上ひさし文学の粋



日本列島、まわりまわって、
もう十八年。
これでお別れ、唐来参和。

今宵は市川右太衛門、
お別れした小沢昭一、
井上ひさしの「お楽しみ」をいふと、
小沢昭一、難波繁雄の舌鋒を、
井上ひさし文学の粋を、
唐来参和、お楽しみ。

しゃぼん玉座第四回公演
「戯作者銘々伝」(ちくま文庫)より

小沢昭一
唐来参和

紀伊國屋書店提携
後援 TBS RADIO

よう、という発想でね、劇場とか戯曲とか、決ってたものをひっくり返す。渋谷の喫茶店でギリシャ劇やるとか、小説を脚色せずにそのまま立体化して舞台のものにするとか、そういう表現にいどんだのは早野です。演劇史的にはちつとも早野のそういうところが抑えられてないのが残念ですね。で、ぼくのほうは、田中千禾夫先生作のモノローグを全部浪曲のフシでやって『新劇寄席』と称したりね。これはわりと褒められたんですよ。もったいっぱい彼とは仕事をしたり、語り合ったりしたかったのに、三十代の終わりくらいから具合がわるくなって、脱疽で亡くなりました。エ

ノケン（榎本健一）さんと同じで名優の病気だ、なんでも居直っていたんですけどね」

しかし小沢さんは、その親友の分まで頑張って立派な成果を上げ、今年（平成十八年）元旦の朝日新聞に朝日賞受賞決定のニュースが報じられた。理由は「俳優としての業績、及び日本の大道芸、放浪芸を記録、再評価した功績」とあり、小沢さんの大きな写真と、「若き日にあこがれた千田是也先生と同じ賞をいただける、というのが嬉しい」という感想が載っていた。私はその千田さんへのあこがれをじかに伺ったばかりだったので、小沢さんの気持ちがよくわかり、ひと際嬉しい。

ところで、「俳優としての業績」の中には当然一人芝居の代表作『唐来参和』^{とうらいさんな}六百六十回上演、の記録も含まれているが、私はもう一度観たいけど、再演はないのだろうか。

「ええ、近ごろはもっぱら童謡ならぬ老謡を歌って（笑）、一人ミュージカル。『ぼくの一モ二力昭和史』と称して、巡演しています。

それがぼくのたどりついた先の舞台だと思ってるんです。歌はいいですねえ。だって芝居だと二時間かけてやつと何かが伝えられるんですけど、歌は三分で伝えられる。でもぼくは溺々^{できでき}とした歌は好きじゃないんで、だいた元気のいい歌が多いですけどね」

小沢さんの一番好きな童謡は多分「しゃぼん玉」じゃないかしら。だって主宰する劇団の名を「しゃぼん玉座」とつけたほどだから。「まあ、あれだって、へ風風吹くな、しゃぼん玉飛ばそ……って、決して後ろ向きじゃないですよ。青空に向って飛ばしたしゃぼん玉に、風よ吹くな、っていうわけですから」小沢さんがこれからも飛ばし続ける多彩なしゃぼん玉がこわれて消えないように、たとえば今度の朝日賞が大きな風よけになるといいな、と思う。

（おわり）

寺院紀行

東京芝

天光院

撮影／タカ才力邦彦

文／真山剛



一五八四年に現在地に、雲養円也上人が創建した天光院は増上寺境内にある寺院の中で最も格が高い古刹である

「前略」当時学友会文芸部を引受けた私が、文芸誌『華鬘』と『学友会新聞』刊行以外に、大学創設の意気高揚のために『学報』発刊が緊急事と企画した時、先生は真先に賛成されて大学側と交渉され、大学出版部を創設して学報（後の『研究紀要』）発刊を実現して下さったことと、先生の私的ゼミに同志を集めて参加したことが結縁で、以後何呉れとない御指導と身上の高配まで恭うしたのであった。時には高価な原書の購入費を立替えて頂いたり、就職や研究助成の配慮を頂いたり、実に親身も及ばぬ力添えを賜ったのだった。こんな先生故、自ずと宗内新進の学徒があげて天光院に集まり、いわゆる三佐藤（賢順・密雄・良智三先生）を中心に土曜会が発足し、土曜毎に原書購読や研究発表などに時を忘れ勝ちでいつも千代夫人のもてなしに預かったものである。そんな潮流から天光院は新興宗教への対応としての新仏教運動や、法然上人鑽仰会の結成の基地となったのだった。その鑽仰会の雑誌名『浄土』が先生の決断で、若僧の私案に決められたのも懐かしい思い出である。（後略）

書き出しから長い引用となったが、この一文は昭和六十三年に発行された『天光院と観智国師』の巻頭に「天光院先住真野正順先生」と題され、肩書きを「門下の末流」として書かれたものだが、さて、これを書かれたのが一体誰だかわかりだろうか……？　ちなみに大学とは大正大学、先生とは真野正順先生のこと。



入口脇に立つ「浄土宗近代教育発祥之地」の記念碑。後の浄土宗の教育機関の発祥の地になる

大正大学を出られた浄土宗のお坊さんには簡単な問題だったかもしれない。答えは浄土宗門跡の中村康隆猥下である。

お坊さんでない読者にわかりやすく説明すると、猥下とは高僧の敬称で、浄土宗で一番偉いお坊さんと同時に京都は東山にある浄土宗総本山知恩院の門主（住職）という立場でもある方だ。

ただし、これを書かれたのは浄土宗大本山増上寺の法主（住職）の頃。そして猥下がその前の大正大学学長時代に事務局長だったのが現天光院真野龍海住職。この真野住職が猥下がかつて面倒を見てもらった真野正順先生の弟子だけに、その真野住職の寺、天光院発行の本の冒頭にあげた序文だけでなく、題字まで書かれている。蛇足だが、その本の筆者は大正大学史学科の教授、故玉山成元先生で、昭和四十年にはこの本の元となる『天光院史』を書かれている。

さて、長い引用の上にその説明まで長くなったが、本『浄土』誌の発行元法然上人鑽仰会がどこでどのようなようにしてきたかを的確に表わしている上に、今年で百歳を迎えられる中村猥下が同じこの『浄土』に祝辞を寄せられ、そこにも本誌発行の経緯が記されていることから、まさに記念すべき通巻八百号にふさわしい一文として引用したのである。

また、真野龍海先生は平成九年より法然上人鑽仰会の会長を務められていることから、この記念すべき八百号の寺院紀行は、月刊

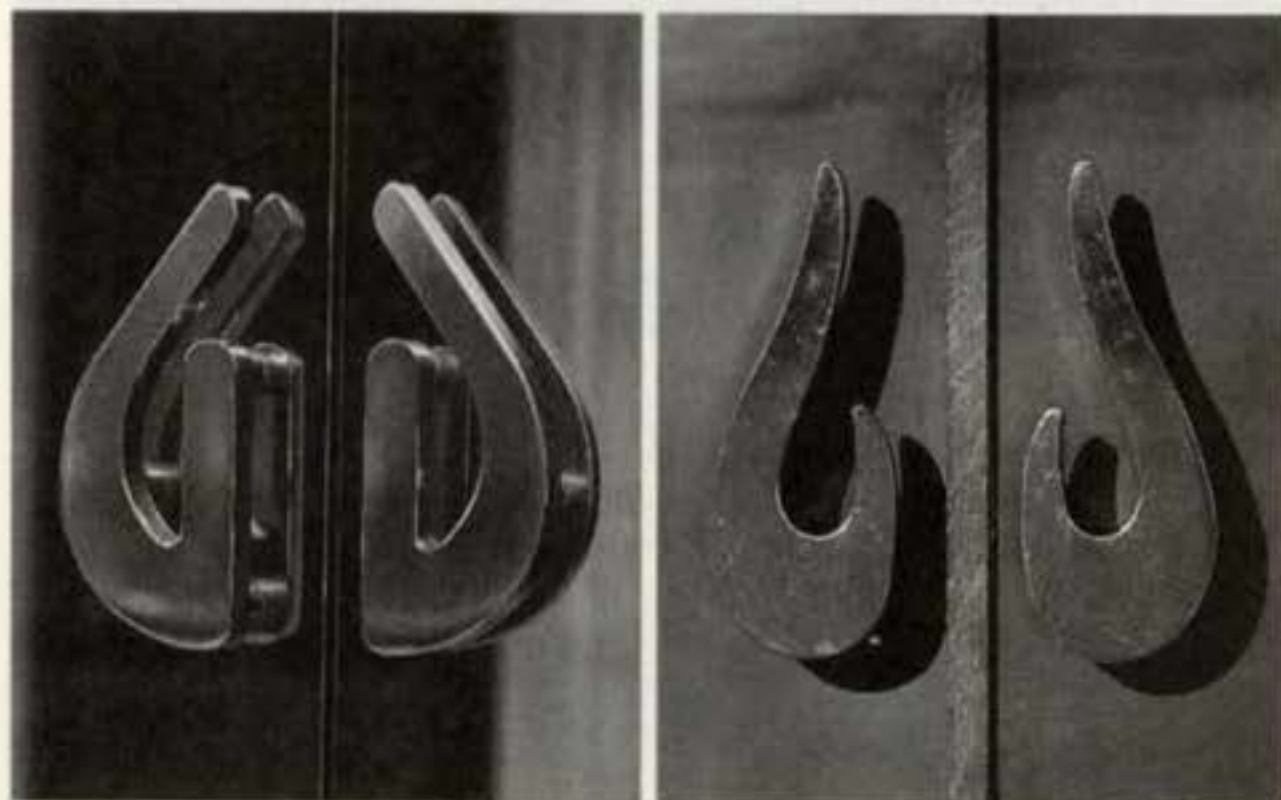
「浄土」の発祥の寺、天光院を訪れたのである。

ということ、天光院がどんな寺院で、住職がどんな方なのかを伝えなくてはいけない。天光院がいつできたのか、誰が建てたのか、どんな伽藍なのか、どんな歴史があるのか、どんな行事をしているのか、どんな本尊や仏像や記念碑があるのか、などを当然例号同様に書かなければいけないのだが……。しかし、敢えて「天光院を知りたければ天光院のホームページを」と言ってしまう。

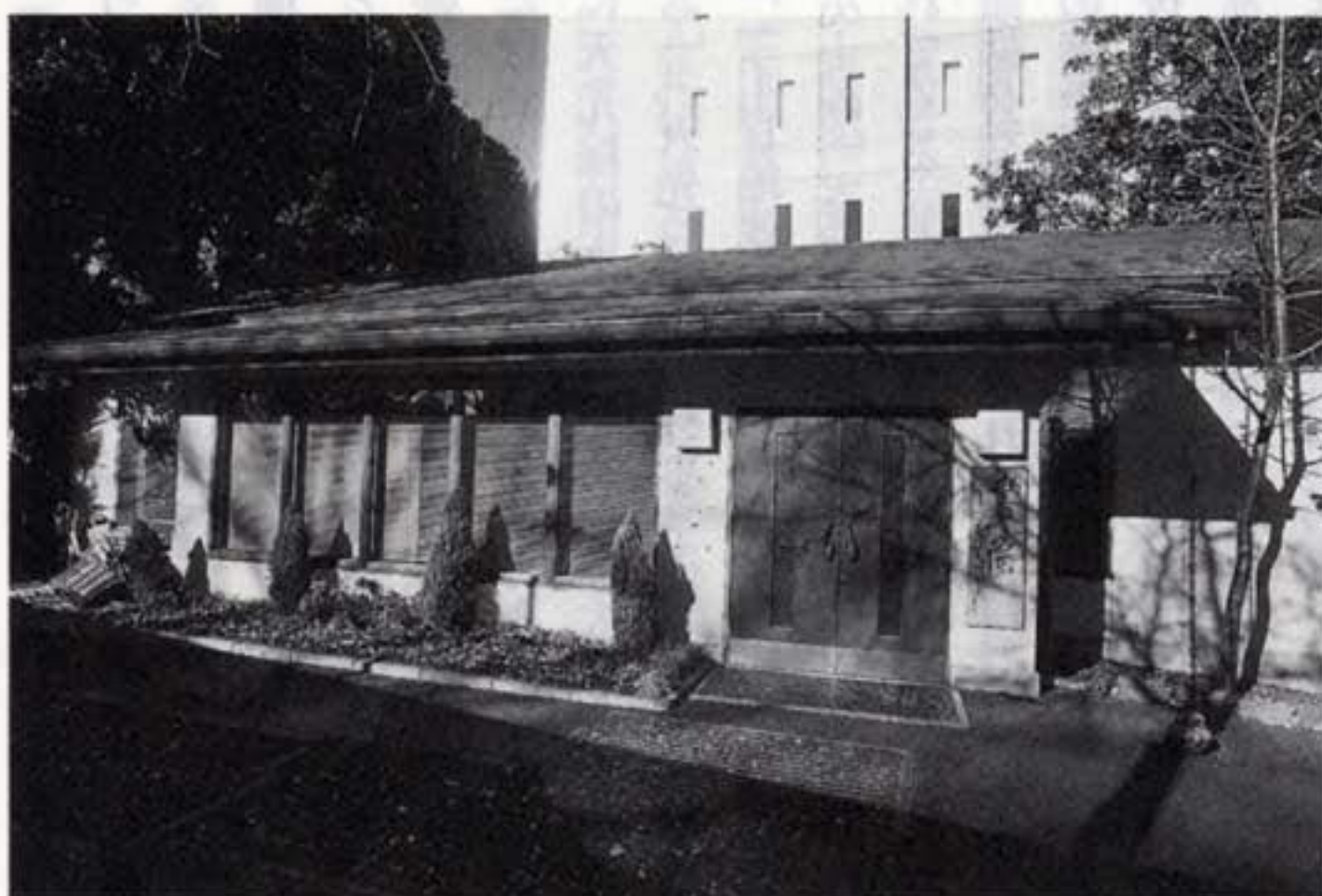
ここに天光院のホームページの大目次を紹介しよう。

「ホーム」「天光院史」「行事予定」「文化事業」「ギャラリー」「住職放談」「子育て地蔵」「研究論文」「浄土の道」「リンク」と並び、最初の「ホーム」を開くと真野住職作詞・曲の「子育て地蔵様賛歌」の曲が流れてくる。ちなみに「浄土の道」は真野龍海住職の近著で法然上人鑽仰会発行だが、それも含め大目次を開くと小目次がならび、天光院の歴史、行事、伽藍、住職の活動、サークル活動のお誘い、住職の後援会の案内や放談や論文……。と何から何までが懇切丁寧に見たり読んだり、そして聞いたりできるのである。

これまでもいくつものお寺のホームページを開いたが、こんなに充実しているホームページを見たことがない。この褒め言葉は単にホームページの画面だけでなく、実際に行っている行事や、実際に住職の文章や後援という実際の活動が充実している、という意味も



写真右が書院入口の取手、写真左が本堂入口の取手。書院が女性の手の合掌、本堂が男性の手の合掌をあらわしている。



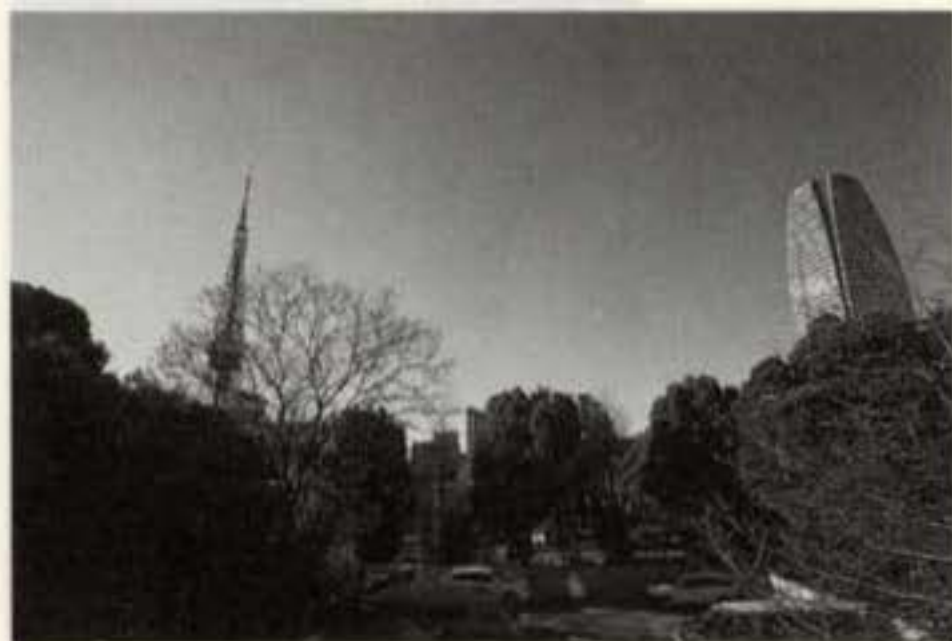
書院のシュリーホールは境内奥にあり、かつて天光院で経営していた芝幼稚園の園舎跡に建っている。法要から美術展まで多目的に使われている

含めてである。つまり中身はないがプロに凝ったホームページを作ってもらい、見栄えだけをよくした、というものではない。

天光院第二十二世真野龍海住職は寺院紀行で天光院を訪れることが決まり挨拶に行った私に、「どんな記事になるか楽しみです」と言われた。その時はその意味がわからなかったが、ホームページを開いて、なるほどその意味がわかった。「諸事漏らさずホームページに書いてあるが、さあ、どうまとめるかな」ということだ。

もちろんIT全盛の昨今とはいえ、インターネットに無関心な人もいる。実はかく言う私もメールを始めた当初に嫌なことがあり、以来それがトラウマになっているのだが、年齢に関係なく無縁な人は無縁に違いない。しかし、そんな無縁な人でも天光院を、あるいは真野住職を知りたくば、是非ホームページを見て欲しい。それぐらい充実した内容である。

実はこの号が発行される直前に真野住職はリハビリ入院から退院されると聞いている。以前お会いしたときは杖より車椅子の方が多くなりかけていた頃だが、退院後は杖で歩けるようになりそうだという。そして、住職は間違いなく退院後すぐに色々な活動に戻されるに違いない。そして、おそらく入院時のことや、復帰後の活動をまたホームページに載せ、天光院や住職の今を本当にリアルタイムで書き換えていくに違いない。それを考えると、月刊誌の記事だと、



本堂入り口の二階ベランダからは東京タワーと愛宕グリーンタワーが見える

それこそ印刷されている内に化石になってしまおう！

冗談はともかく、今回の取材で最初に撮影したのが、口絵カラーのお坊さん三人の写真である。シュリーホールと名付けられた書院の阿弥陀仏来迎のステンドグラスを背景にした写真で、真野龍海住職、竜人副住職、そして威人上人と、親・子・孫の三世代の僧侶が揃った一枚だ。

よくあることだが、どうしても親が活動的だとその子は親の手伝いが仕事のようになりがちで、自分自身の思うことができにくいことが多い。特にお寺のように数世代が一緒の家において、しかも跡を継ぐとなると余計にそうなりがちだ。だが、天光院は龍海住職がコースと絵画、竜人副住職が詠唱、威人上人がガーデニング、とそれぞれの得意分野を持っている。そしてその得意分野で天光院を訪れる壇信徒や門前を通る老若男女を楽しませている。

もともと滋賀県出身の真野龍海住職は真野正順先代住職に養子として入られたが、学問の分野ばかりか芸術の分野にも秀でていて、勧学という浄土宗最高の学者であるとともに、絵画の個展を海外でも開かれたり、作詞作曲をされるなど音楽にも才能がある。毎年定期的に開かれる天光院展も盛況だ。

真野竜人副住職は詠唱の先生として多くの生徒に教えているが、つい先年までは増上寺に勤めながら、父でもあり先代でもある龍海



地下鉄御成門入り口から歩いて二分の境内入り口に建つ子育地藏尊像。多くの人が手を合わせる

住職のフォローしてきたという。活動的な龍海住職にフォローされたつもりはないにしろ、おそらく竜人副住職の陰での支えあつての天光院だ。

し威人上人はまだ、お坊さんになりたての青年。花をいじるのが好きで、ホームページの扉の天光院本堂の写真にも、彼が手塩に描けた綺麗な花が階段に並べられている。また、最近には拡張し始めた墓地整備も自ら進んで行っている。こうした三代の三人が僧侶として行ふのが、もちろん葬儀や法要だが、天光院ならではの大きな行事がある。伝衣式と呼ばれる式で、浄土宗の宗宝になつてゐる天光院藏観智国師肖像が主役となる増上寺住職の晋山儀式に先立つ式だ。

観智国師肖像は本尊、過去帳と並ぶ天光院三種の神器ならぬ仏器で、伝通院あての観智国師の書状とともに残つてゐるもので、新しく増上寺の住職になる法主が天光院に赴き、この肖像の前で袈裟を頂き、同時に「天光院」という声があがる。まさに天光院ならではの特別な式である。このように増上寺の法主が自ら天光院に赴くように、天光院は同じように増上寺の境内にあつた四十九か寺（現在は二十九か寺）の中でも一番上の格で、全国の浄土宗寺院名簿の東京欄の一番最初である。

この他にも天光院ならではの足跡も多く、日本で初めての保険の講演会が開かれたり、浄土宗教学の中心だった浄土宗学本校がここ



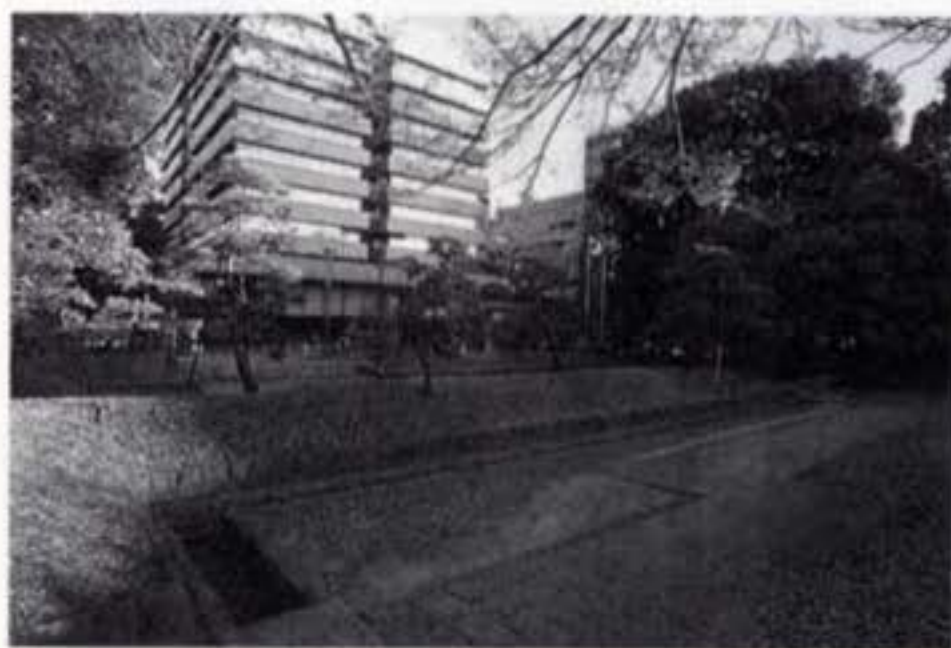
道路沿いの壁には法然上人絵伝が並んでいて、通行人の目をひいている。写真は遊女に船上で教えを説く法然上人

が始まっている。本堂北の木造二階は、浄土宗教学院（東部）設立の会合、後に研究所として用いられ、現住職の初の学会発表の所。NHKの宗教放送について、有志の学者方やNHKの摩尼さん等、度々の会合もあった。月刊仏教雑誌『在家仏教』発行草々の時、同人の先生方もしきりに参集し、現住職は、お茶当番だった。また、現在の書院にはかつての芝幼稚園の園舎があり、記念塔や芝子育地藏としていまにその歴史を残している。そして何より当、法然上人鑽仰会もここ天光院を発祥の地としているのである。

先代真野正順先生を中心に多くの志高き青年僧侶が創刊し、七十年八百号という歴史を刻む『浄土』、真野龍海住職も若かりし頃、リヤカーにできたばかりの『浄土』を乗せ運んだという。当初から今日まで手弁当で何とか続けているというが、七十年の歴史の中で本当に多くの方がこの『浄土』に関わり、『浄土』誌以外にも別冊の『念佛読本』やカレンダー、宝暦、トラクトという教化用のパンフ、絵はがきなどを生み出しているという。今回の通巻八百号を迎えるにあたり、こうした歴史やあくまで会員によって成り立つ会の意義をより多くの人に理解いただき、応援して欲しいというのが真野会長としても願いでもある。

ただ、このことは天光院のホームページでは取上げられていないのだが、これは真野先生の照れなのだろう。（ルポライター）

（天光院HPアドレス www.evam.ne.jp/tenkoin）



天光院からすぐの港区役所（正面）とその前の芝公園。ここの掘り跡が桜川跡で、桜川から桜小学校、天光院幼稚園の芝桜会など、桜の名前が今も残っている

往生について広辞苑では次のように述べている。

一、この世を去って他の世界に生れかわること。特に極楽浄土に生れること。

二、死ぬこと。

三、あきらめてじっとしていること。どうにもしようがなくなること。

閉口。「停電で往生した」

大衆的な辞書でこのように記されていることから、世間では往生すなわち死と、極楽往生は死後のことと考える傾向がある。

しかし無量壽経で説かれている本願のなかの第十八願で

「十念すれば必ず浄土に往生させてあげよう」

と阿弥陀仏は誓っておられるが、死後の往生は本願にはない。また第十九願の

お誓いは

「命の終わろうとする時に、その人の前に現れ浄土へ迎えてあげよう」

ということであって死後の来迎ではない。平生の来迎である。

法然上人は、「つねに仰せられける御詞」の中で、

「往生の業成就は、臨終平生にわたるべし」

また次には、

「人より物を得んずるに、すでに得たらんと、いまだ得ざると、いずれか勝るべき。」

源空はすでに得たる心地にて、念仏は申すなり。」

と仰せられていることから、上人は平生の往生を期しておられたと教えらるるのである。

浄土誌上句会

FORUM
浄土の広場

●袋

〔特選〕年の瀬や島より運ぶごみ袋

浜口 佳春

島での家庭のごみはみな海へ捨てていた。公害の心配など全くない頃のことだ。今はなにかにつけて規制が多い。焼却場さえその温度が問題にされる。便利さを追い求めて、逆に変なことがどんどん増えてくる。

〔佳作〕コンビニの袋に入れてわがお節

有田 由佳

袋田の滝真二つに凍りけり

奥村 喜久

小春日や柵に沿い来る袋馬

井村 善也

●肩

〔特選〕降車する肩にスケート靴光る

中村 達雄

スケートは女子を中心に、今や日本のお家芸になった。スケート場は小さい子供でにぎわっているそうだ。この句のはもちろん若者

今月の兼題
「ふくらむ」
「眠り」

選者=増田河郎子 自由題句

〆切は2006年2月20日

〈特選〉

揚げ船の窓すべりゆく冬落暉

石原 新

●自由題

だろう。肩に振り分けにした靴の光りが、さあ滑るぞという気持ち代弁している。

〈佳作〉 爪立ちて肩越しに見る大道芸

片桐てい女

肩揚げに幼々残る京舞妓

中島 一子

石仏のなで肩濡らす初しぐれ

北川 弘子

ドックというほど大きなものでなく、船も遊覧船のような、身近なものと見るのがよいようだ。いま夕日が船窓に輝きながら沈もうとしている。作者は日を背にして、その様子をじっと眺めているのである。

〈佳作〉 托鉢の張りのある声歳の暮れ

中島富士子

栗むくに立てたる爪の痛みかな

中村 真一

ひしめいて水仙の芽の小指ほど

寺下 忠至

さっちゃんねネ...

27 かい目

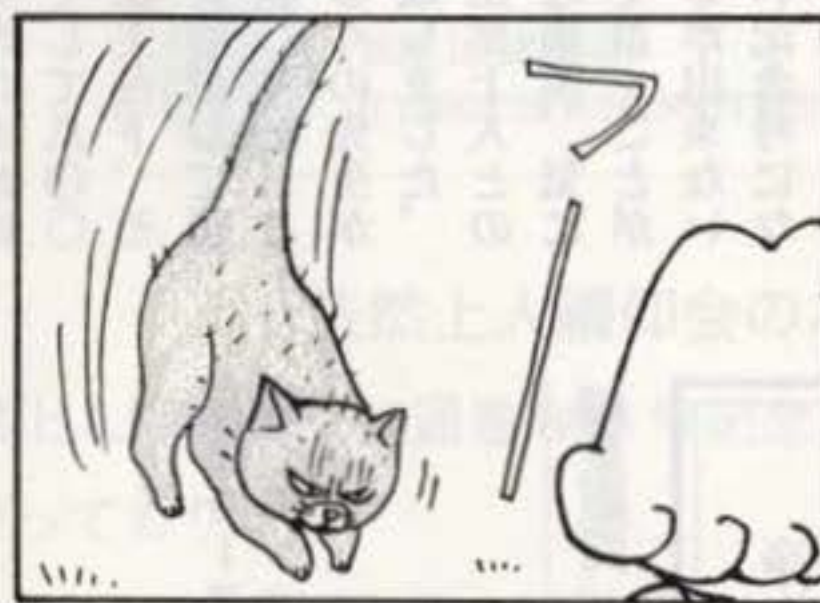
かまち♡ぽろろ



さっちゃんねえ

28 かい目

かまちのよう



編集後記

東雲に思いを重ねて八〇〇号 岱潤

当誌もいよいよ今号で八〇〇号を迎えることが出来ました。真野会長の言にもあるように、資金もバックも何も持たない当会で、よくぞ続いたものと思わざるを得ません。諸先輩諸氏のお力のお陰と唯々感嘆し、その末席に加えて頂いたことに感謝申し上げます。

法然上人鑽仰を称え続けて重ねた八〇〇号です。その記念すべき本号は、原点に戻ることを基調とすべく企画させていただきました。つまり個人の信仰の原点。私たち僧侶が教化のための教えとして考える法然教学ではなく、その人個人にとつての信仰としての法然さま、そして法

然さまとの出会いをお話しいただければありがたいと考えました。そして八〇〇号を記念し、各大本山の御法主台下、そして他宗でも法然上人を特に尊崇して頂いている先生にご執筆をお願いしたところ、ほとんどの台下を始め多くの先生が快くご承諾頂き、本誌が完成しました。台下や諸先生にとって、法然上人との出会いや、教えで一番好きな箇所、気になつてゐる所などを披瀝して頂くことが出来ました。まさに本誌でしか出来ないことだと思います。素晴らしい記念号になったことを、各台下を始め諸先生に編集チーフとして心より御礼申し上げます。(長)

雑誌「浄土」

特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
江口定信(浦安・大蓮寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
大田秀三(大本山清浄華院)
北山大超(焼津・光心寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮真(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村真道(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
真野龍海(芝・天光院)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

編集顧問

大室了皓

編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十二巻二月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷

平成十八年 一月二十日

発行

平成十八年 二月一日

発行人

真野龍海

編集人

佐藤良純

印刷所

株式会社 シーティイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話

〇三(三五七八)六九四七

FAX

〇三(三五七八)七〇三六

振替

〇〇一八〇・八・八二八七

月刊 浄土

800号



法然上人鑽仰会

HOUNENSYOUNIN SANGOUKAI



法然上人鑽仰会

月刊「浄土」

浄土の広場

月刊「浄土」検索



| お知らせ | 会員募集 | サイトマップ | メール |



法然上人鑽仰会

(C)2002 HOUNENSYOUNIN SANGOUKAI. All rights reserved.

法然上人鑽仰会のホームページご紹介

法然上人鑽仰会では通巻 800 号記念事業の一環としてホームページの整備を行っております。

ホームページでは今までに刊行された浄土の目次検索や一部本文の検索などができますし、内容も一部提供してインターネット上でお読みになることができます。

また浄土の広場では、インターネット上から俳句の投稿などもできます。どうぞご覧ください。

<http://honen.sangou.net>

<http://gekkan-jodo.info>

通卷800号記念



ひな 梶谷佳加作

法然上人鑽仰会